

令和４年度 第２回国産材の安定供給体制の構築に向けた 北海道地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和５年１月１６日（月） ９：３０～１１：３０
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom）
- 3 参加者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概 要

（１）冒頭挨拶

○北海道素材生産業協同組合連合会 高篠 会長

本日は、林野庁をはじめ北海道森林管理局、北海道水産林務部林業木材課、道内の林業木材産業、住宅産業に関わっておられる川上から川下の各分野の皆様、年始めの大変お忙しい中、会議にご参加いただき心から感謝申し上げます。

依然としてコロナ禍が続いており、また、ロシアのウクライナ侵攻が１年近くと長期化し、エネルギー問題、物価上昇をはじめ世界情勢が混迷を深めている。木材を巡る環境も変化し続けている状況にあり、グローバル化、ボーダレス化を強く実感させられている。

このような情勢の中、国産材、道産材の安定供給、安定需要を通じて可能な限り外材に依存することなく国産材の比率を上げていくことが、国内の林業木材産業の発展に大きく貢献するものと考えています。それぞれの分野の課題も多く、一朝一夕にできることではないが、今回情報を共有し同じ認識の中で一步でも前進させることが重要と思っている。

今回のアンケートにおいて、新たに木材需給の急激な変動に対応できる体制の構築が設けられており、木材に関連する業界をより強固なサプライチェーンに繋げていけるか、今後の取り組みに期待している。

道内は本州以南と違い取り扱う樹種がカラマツ、トドマツとなっており、構造材としての利用拡大に取り組まれているが、原木不足を背景に木材価格は高止まりで推移している状況にあり、北海道地区の木材資源や木材需給の現状や課題についても情報を共有し、安定的な木材の価格・供給・需要につなげることが重要と考えている。

本日の協議会での情報共有が各分野の取り組み、そして国及び北海道の施策や予算などに反映され、道内の林業・木材産業・住宅産業の発展に寄与することを期待し、皆様からの貴重な意見、情報提供など活発な情報交換をお願いする。

（２）議 事

① 需給動向について

○北海道大学大学院農学研究員 柿澤 教授（以下、柿澤 座長）

不透明な状況が続いており、北海道は全国と違った樹種・需給状況になっていますので、今回の意見交換は非常に重要だと思います。皆さん、積極的なご議論をお願いした

い。

今回、今後の情報交換のあり方に関してもアンケートで伺った。皆さんからいろいろと情報をいただきますが、併せてこれからの情報交換のあり方に関してもご意見等をいただきたい。

最初に林野庁から資料の説明をお願いする。

○林野庁木材産業課 永島課長補佐

資料1～4及び参考1説明。

○柿澤 座長

皆様から現状あるいは見通しについて情報提供をお願いしたい。今回は、現在の需給価格の動向とあわせて、今後の木材需給の急激な変動に対応するための情報交換・提供のあり方に関してご発言があれば併せてお願いしたい。

それでは順番に、川下から川上に遡る形で情報交換していきたい。

○（一社）日本木造住宅産業協会 北海道支部 正木 事務局長

2022年上半期は、木材や資材の価格高騰を販売価格に転嫁できていない業者が比較的多い印象であった。夏以降、徐々に高騰分を販売価格に転嫁する業者が増えてきて、その影響もあり、秋以降受注指標が低下傾向にある。国産材の活用拡大については議論にはなりつつも、そこまで大きな変化はない印象。

○（一社）JBN・全国工務店協会 武部 理事

木材の製材関係の単価に関しては、今落ち着いてきている状況です。

ただ、昨年からずっとそれ以外の製品も全体的に上がり、物価上昇分を受注金額でカバーしきれない。後半に至っては、話を受けても契約まで至らない物件が出てきている。

木材以外の木造建築に関わる様々な生コンクリートとか、半導体的な住器関係も含めて、この物価上昇は大きなハードル、課題かなと思っている。

今後に関しても、特に北広島、江別周辺も含めて札幌周辺の土地の価格が非常に上がってきている。物価上昇、あるいは土地の価格の上昇を考えると、今後の見通しは戸建住宅に関しては非常に厳しいと思っているので、それらも含めて地域の工務店業界は、今年はちょっと厳しい状況かなと考えている。

○北海道プレカットセンター（株） 中根 代表取締役社長

プレカットは、現在、来春に向けてかなり受注が厳しくなっている。資材の価格の上昇と、ローンが組めないとかで、来期に向けては非常に厳しいとお客様から伺っている。

木材価格に関しては、輸入材を中心にして、まず在庫が多いこと、輸入価格、今後もまだまだ下がってくるといった中で、私どもの調達価格も少しずつは下がってきているが、集成材でピーク価格より、今は30%近くまで下がってきて、最近はそれよりもう一段みたい話も出始めている状況になってきている。プレカットの販売状況もかなり値下げ競争となっていており、値下げしてもいいから受注につなげていく状況に変わってきている。

一方で木材以外の住宅資材、木質建材も含めて4月以降にかなり皆さん値上げをされると伺っているの、木材を中心に扱っている私どもとしては非常に厳しい状況になってく

と考えている。

○柿澤 座長

川下から情報提供いただき、木材価格について、とりあえず落ち着いてきた面もありつつ、木材以外の物価上昇が、かなり大きな影響を及ぼしていること。それから札幌圏の土地の価格の状況がマイナスの影響を及ぼしてきていることで、これから先、かなり厳しい状況になってくるのではないかと。価格を下げる形での競争も、これから出てくることもあり、全般的にかなり厳しい状況というご報告をいただいた。

続きまして川中から情報提供をいただきたい。

○(株)サトウ 松永 代表取締役社長

私どもの仕事は梱包材とかパレットが中心になるので、今の建築材の流れの話とは若干違った視点かもしれませんがご容赦願いたい。

我々の梱包パレットの流れでいくと、建築材ほどの影響はまだ出ていませんが、やはり昨年の秋口以降から徐々に仕事が落ち着いてきて、年末頃になると暇とまでは言いませんが、その一歩手前ぐらいまで行っている。この要因は、まず一点は、今まで納期がすごく長かったことになっていて、お客様がそれに見合った在庫を自社で積み上げたことになる。ここに来て納期が早くなりました。2・3週間でものがということになったので、正直2か月ぐらいかかっていた時期もありましたから、その間積み上げていた在庫を適正な在庫まで戻すという動きに来ている。今調整局面という部分と、仕事もちょっと落ちてきている。両方重なって現在もまだ調整が付ききっていないと思っています。

一方で、建築材はあまり良くないので、特に我々梱包材をやっている業界、北海道から持っていつている本州のお客さんが多いですが、そちらでは、スギ材の工場で仕事がかなり減って、また再び建築材から梱包パレットに一時的に避難しようかということで取り組む方が増えてきて、その人達は結構その間の相場感も分からない部分もあるでしょうが、値段を崩しながら販売している。今、カラマツとスギ材ですが、定尺材同士で比較すると立米単価にすると約1万円ぐらいの差がついている。我々、梱包材、パレット材をやっている業者は、仕組材を全部プレカットしたものをお客様に納入すると、その値差を埋められる工場は、仕事がそんなに落ちずやっているが、定尺材を主力でやられている工場は、相当厳しい流れに向かってます。特に建築の関係で言いますと、集成材向けのラミナ、東北の工場等々納めているのが多かったと思うんですが、ここが今需要が急変したことがあって、価格を急速に下げてきています。一つの工場は、価格を急速に下げて、量はそれなりに買いますよというところですし、他の工場につきましては、価格はそこまで下げないけど量はいらないと言っている工場があるので、こういった二極になってきている。

我々の見立てとしては、とりあえず今年の前半戦は、そういった状況に巻き込まれながら、あと輸入材の高騰在庫も非常に高い数字になっているのは聞いてますので、それらがある一定線まで落ち着いて減少してくるまでは、そういった状況が続くのではないかなと危惧している。

○佐藤木材工業（株）佐藤 代表取締役社長

先ず川下の話からすると、集成材については落ち込みが始まっていて値下げの幅も大きい。一方で川中の製材については、一昨年ほどでの勢いはないが一定の注文は頂いている。製材価格の値下げも始まっているがまだ徐々にという形で住宅向けほどの落ち込みはない。この状況が続くかどうかはまだ分からない。製材で何を作るかによって違うが、当社の製造品目は、関東圏の躯体工事向けの栈木が多くそちらの工事計画の残があり、その需要に助けられていると考えている。

一方で、当社は川上側の造材や造林もやらせてもらっているが、伐採量を増やしていこうという動きと、それに合わせて造林の作業量も増える動きがある。人手不足の問題は依然として解決していないが、川上側については、安定して仕事がある。

当社全体を通してみると、川上側は比較的安定しているが川下側はどうしても弱い。年初に当たり私から従業員に対し、状況に応じて部門間の応援を積極的にやっていこうという話をした。川下側の特に製材なり集成材で、どうしても仕事がない状況になれば、造林作業の地拵や植付等の工程は人手を必要とするので、応援あるいは雇用確保という面からも人を部門間で回して、年末まではしのいで行くような形になるのではないかと考えている。

○協同組合オホーツクウッドピア 中根 理事長

集成材に関して、今回のウッドショックが終わり現在に至る過程で、製材品の中では最も悪化した品目になっていると思います。かなり輸入材の入荷量が多かったことと、ラミナの価格の上昇に引っ張られて、ラミナ価格は落ち着きつつあるが、まだ在庫を含めた原料は非常に高い状態となっている。一方販売価格は、かなり輸入材の入荷量が多かったことなどの影響で下落傾向にあるといったところで非常に厳しい状態になってきています。受注に関しても、昨年までは住宅、非住宅含めて一棟まるごと発注が来るといった状況だったが、輸入材が大量入荷し始めた昨年の夏場以降、輸入材で入荷したものが輸入材を使用されており、輸入材で入ってこないサイズだけが国産材集成材工場への発注となっていて、受注量も大幅に減少しています。今まだ輸入材の在庫が多く、そちらを積極的に在庫消化を進められて、道産材に注文が地場の工場、資材工場に来るのは不足しているところだけで、受注もかなり落ち込んできているのが今の状況である。

来季に向けても、住宅あと非住宅も少し仕事が薄いと聞いています。

○柿澤 座長

続きまして、需要者側ということで、製紙からのお話を伺いたい。

○日本製紙（株）旭川工場 東 事務部長代理原材料課長

紙の需要がかなり落ち、年々落ちており、特に新聞関係は毎年7%、8%落ちております。ただ一方で、チップの消費量が減っているかというところではなくて、全体的にチップも世界的に需要がタイトという形になっております。旭川工場は国内材・道内材の使用がほとんどですが、発生量が落ちています。我々、日本製紙木材さんから購入させても

らっていますが、特に2022年に関しては、道内の広葉樹が落ちました。昨年までは、その前までの在庫があったので、そこから出してもらっていましたが、造材が針葉樹をメインに出すようになり、広葉樹が出なくなりました。今チップ不足という形になり、いろんなところからかき集めて何とかやっています。紙の価格も、価格改定は3回目を行っていますが、それ以上に石炭を始めとした燃料費のコストがかなり上がっております。紙価格の値上げの一部は木材チップにも還元させてもらっているが、価格改定しても、なかなか追いつかない状況にはなっています。

○柿澤 座長

引き続き需要関係ということで、木質バイオマスからもお願いしたい。

○オホーツクバイオエナジー（株） 長谷川 代表取締役社長

原料ですけれども、2021年の米中貿易摩擦の頃は、いわゆる製材で売り切れない丸太も、かなり私どもで買わさせてもらっていたが、ウッドショック以降、まず木価が非常に悪くなった。それが当たり前の産業なので仕方ないところですが、それに伴ってパルプ材とか燃料材に使う造材割合がかなり落ちてきているかなということで、原木の入荷量がちょっと減ってきている。それに合わせてウッドショックの影響でじわじわ値段がまだ上がり続けている状況に加えて、近隣にバイオマス発電所が稼働し始めたので、それに伴って燃料の多少なりとも引き合いが強くなっていることで、今、原料面については非常に厳しい状況が続いています。それに加えて発電所ですので、脱硫用の石灰とか、脱硝用の尿素水、それに加えて灰処理関係のセメント、これら全て値上がりしているもので、今はとにかく持っている在庫を上手に使いながら耐えていく状況がしばらく続くような状況です。

○王子グリーンエナジー江別（株）江別発電所 竹中 所長

今、発電割合100%バイオマスでやっており、その中で木材は道内材100%でやっています。その他に今PKSを少し輸入で扱っているが、発電量も設備能力マックスで発電しており、一昨年、去年と使用する木質の量は大体同じくらいです。この状態は今後も続くと思います。木質は、王子木材緑化さんからすべて手配してもらって購入しており、一応不足なく道内材を集められている状況です。

道内の木材に関しましても、今、枝条を半分ぐらい使用しております。これも最初少なかったが、だんだん上げて行けて、半分ぐらい使えるようになり、こういった面で取り敢えずは安定して供給していただいている状況です。

しかし、来年以降は道内の新たなバイオマス発電所の稼働もあり、供給はだんだん厳しくなっていくそうだと連絡を受けています。

○柿澤 座長

今まで需要者側からのご発言をいただきまして、梱包パレットに関して厳しいけれども概ね落ち着いてる状況で、一方で建築に関しては、需要減などもあって、いずれも厳しい状況に入ってきていることを伺いました。

製紙とそれから発電に関しても、事業者によって多少異なりますが、原料面で厳しいと

いう意見もあり、コスト増がかなり厳しい状況を投げているとお話を伺いました。

川中で引き続き製品流通に関してお話をしたい。

○物林（株）営業本部北海道グループ 中村 グループ長付特命担当部長

製品のトドマツなんですけど、ウッドショックで一度上がった値段に対して受注というのはかなり集中してましたが、現在は、商品別にちょっと状況は違うんですけど、受注についてはちょっと落ち着いてきている。価格についても輸入の製品の下がる予想に比べれば、徐々には下がってはきているが、弱含みみたいな形で急激な落ち込みみたいな形にはなっていない。

原料に関しても、一時期足りない形で、かなり皆さん集荷されるのに苦労されていたが、現在は極端な原料不足はない形で、各地区の公売も応札が多いのは続いているが、値段に関しては落ち着きを取り戻している形です。

カラマツ丸太に関しましては、事情が違うような形で、先ほど梱包パレットもそこそこ受注があったというお話で、少しずつ落ち込んでいる話も聞きますが、原料に関しては、皆さんのお話を聞いていると、1か月ぐらいしかないところがありますので、そういう面に関しては皆さんまだ購買意欲は高い状態がずっと続いている形です。

集成材の原料とか商品によってちょっと需給にでこぼこが出てきており、今後も原料が少ないというのは、しばらくは続くとは思いますが、値段的に逆転とかが出てきていると思いますので、今後どう進んでいくかというところです。

パルプに関しても、先行して針葉樹の丸太を切ったりして、広葉樹の丸太のパルプ原料が出てこないとか、足りないところと、少し余裕があるところの差も出てきており、チップ用の工場原料は、全体的に比較的皆さん少ない状態が続いている。

当社で扱っている合板材は、一昨年トドマツの需要が回復して、今年度とかは一昨年のその前の年ぐらいの基準には戻ってきている。ただ、いつものことですが天候が悪いとか、こっちから出荷するほうも、相手側も置く場所とか、生産調整とかも出ていていると思いますので、出荷が滞っているのが今現状の状態です。

今後については、値段的には大幅には変わっていませんが、後は住宅の着工も落ち込みもあるし、色々な話が出てくると思います。

○日本製紙木材（株）北海道支店旭川営業所 大塚 所長

丸太、製材等の状況につきましては、皆様述べていた通りです。先ほど日本製紙の東課長がお話をされておりましたが、広葉樹のパルプ原料材の状況につきましては針葉樹、製材等の市況によって伐採、出材量が相当左右される。昨年以降、出材量が少ないことで在庫を随分と食い潰したような状況で乗り切っておりますが、チップ工場と話しの中で、原料不足による今後の先行きが非常に不安視していると、皆さん一様に話しています。そういう意味では、針葉樹の市況に左右されないような仕組みを構築し直す必要があるのではないかと考えております。

弊社としましては、立木在庫をそれなりに抱えています。直近の状況としまして、針葉

樹の用材が売れる状況にはありますが、製紙側が広葉樹不足の状況となっておりますので、広葉樹の山林をメインに切り替えて伐採している状況です。

一方で輸送業界、問題としてあるのは輸送業2024年問題、拘束時間もかなり厳しくなることで、全道一円から集荷している原木、チップの輸送体制に支障をきたす状況になると思われます。関連輸送会社と連携し、どのように対応していったらいいのか、現在、協議を行っている最中です。

○住友林業フォレストサービス（株）東日本事業部北海道営業所 長尾 所長

先ほどから川下の方々の市況の見通しで、ちょっと真つ当な話をするとうれしさをちょっと抑えたいという部分と、川上の方もこれから述べると思いますが、燃料費、資材費等々の価格アップ、それから需要と供給のバランスを私たちは考えながらやっていかなければいけないところが非常にこれから難しくなっていくと思います。

運送運搬の不安がこれからずっと続くので、みんなで何かいい方法を考えられればと思っています。

○王子木材緑化（株）北海道支店 服部 支店長代理

流通に関しては、今年度上期については、昨年度からの引き続きで順調にいったが、下期に入って下降傾向という状況、資料通りの流れになっています。

チップ工場への原料供給は、かなり不足しているので、製材工場もまだ不足気味だということで未だに原木は居所高は続いていると思うが、今後の需要を考えていくと、これから冬から春、出材期にかけて丸太が出てくる見込みの中で、どこまで値段、数量を維持できるのか危惧しています。できれば、ソフトランディングしていただければと考えていますが、そういう流れに期待したい。

製品についても、今のところは受注が多少減少している。我々抱えているプレカット工場、ツーバイフォー工場も、下期から急激に受注が落ち込んでおり、計画に対しては何割か未達になる見込みです。来年度も今年度並のものが維持できるように努力していきたい。

○柿澤 座長

流通からお話を伺い、特に原木に関しては落ち着いてきてはいるが、カラマツで足りない状況、あるいは広葉樹で足りなかったり変動が大きいといったお話を伺ったかと思えます。今後ということでトラック輸送に関する懸念と、これから出材が出る中で価格を懸念をされているといったことを伺えた。

川中の製品に関して、道木連からコメントいただきたい。

○北海道木材産業協同組合連合会 内田 副会長

特に建築材についてお話をしたい。冒頭、高篠さんから道産材のシェアを高めていかなければいけないというお話があった。今後の国際的な動向も少し懸念される中、確かにそういうことはやっていかなければいけないことだと思っている。道木連は、昨年度から製材工場とプレカット工場の協定をモデル的に結ぶ取組を行ってきたが、本年度から道庁

が建築材の利用促進を進めるため、2年間の安定的な需給協定を結んでいけば3,000円/m³が補助されるという予算をつけていただいたので、そのオペレーションをやっている中で、道内全域でそういう形の協定が、多分100本以上結ばれる状況になっています。

2年間の協定で、継続的に安定した価格で供給をしていく趣旨の協定となっているが、一方ここに来て特に羽柄材を中心に外材が在庫過多になってきた中で、協定に基づいて継続的に道産材の価格を安定させることがなかなか容易ではない。既に価格も大幅に下がる状況が出てきている。よく道産材は安定供給できないからなかなか使いづらいという話があるが、ある意味欲しいときに欲しいと言って、いらないときにはいらないという話になってしまうと、設備投資もできないので、このところをもう一つランクアップしていただいて、各製材工場も需要側も、いろんな課題はあると思うけれども、そこを一つ乗り越えないと今後本当に資源ナショナリズムの台頭みたいなものが起こって、どうもこうもなくなってしまう場合、道内の木材産業が本当にこの住宅産業とか、いろんなものを支えられるのかという懸念があるので、いろいろ関係者のお話を聞きながら木材団体としては、活動していきたい。

チップの値段について、国有林の原料材の原木価格がちょっとヒートアップしている一方、一般材は道内全体で2割程度あるいは3割程度上がって推移してきて、今それが少し落ち着こうとしていますが、この2割3割原木が上がる中で、原木の半分以上はチップとなるわけですから、その価格が本当に数百円しか上がらないと、製材原価に負荷がいつてしまう。これがもっと過激になると、製材をやっているにしても全然儲からない話になってしまって、そのバランスをとるためには、チップの値段についてご配慮いただかないということで、昨年も関係企業に要請にも上がりました。木材産業全体を支えていかないとけないという観点から、さらにご配慮いただきたい。

FIT発電についても、電気の売値が固定価格で決まっているのでチップの買値を上げられない話も聞こえているが、木材を使うセクターがみんなそれに繋がっている訳ですから、発電事業者にも是非ご配慮いただきたい。これらのことを総合的に考えて行かないと、この先のいろんな変動に対して耐えられない産業になってしまうと思っています。

○柿澤 座長

道産材の建築材の利用の拡大の取り組みという視点でお話をいただいた。

ここまで川中、流通加工についてお話を伺ったが、全体を通して皆様から質問とか、あるいは補足的なコメント等があれば伺いたい。

○北海道木材産業協同組合連合会 内田 副会長

林野庁にお願いしたいのが、非常に精緻なグラフでこれまでのトレンドは押さえられていて、非常に分かりやすいが、一番気にしているのはこれからどうなるんだろう、外材はどうなるんだろうという点です。いろんな方に聞いても、これはなかなか分からないという話になってしまって、皆さん本当に心配をしているところで、その辺については、公式

な見解はできないかもしれないが、多分林野庁では輸入社の情報とか、いろんな情報を手に入れていると思いますので、何か公式見解じゃなくてもいいので来年度というか、これから春夏にかけて住宅着工数が心配される中で、どんな感じなんだろうという雰囲気でもご示唆いただければ大変ありがたい。

○林野庁木材産業課 永島課長補佐

今後の見通しをお示しすることは、皆さん注目が集まっているし、なかなか難しいのもその通りですので、ヒントとなるような情報を可能な限り集めて伝えやすいような方向で考えていきたい。アンケートもいただいていますので、十分な対応ができるか分からないが、また細かいところを調整させていただけたらと思っている。

○柿澤 座長

そのほか何かありますか。

○林野庁木材産業課 永島課長補佐

株式会社サトウの松永さんからのコメントで梱包材の価格について、北海道と本州での差があるというお話があったと思うのですが、この価格というのは、今後の動きとして、徐々に本州も調整がかかっていくものであるのか、結構本州がリードして、そのままいきそうな雰囲気なのかとか、今後調整が行われていくものなのかを教えていただきたい。

○(株)サトウ 松永 代表取締役社長

今の現状が本州と違うのをお伝えしなければならないが、直近で言いますとカラマツの原料は、合板業界も引き合いは弱いですが、価格はあまり下げたりせず買っていることなんです。一方で本州のスギの業界については、ヒノキも一緒だと思うが、市況に合わせて原木が軟化していっていることだと思います。

工場の数も、スギの製材工場が多くて、需要が減少するとかなり仕事が急速になくなることが世の常ですが、それに対して原木もうまく合わせて行けば価格は下げやすい。一方で北海道の場合は、まだ製材工場、一般の工場は原料が在庫的にも足りていない状況なので、製品の価格を下げてまで仕事を取りに行く環境にはなりづらいことなので、今の現状でいうと、大きくそのことが価格差になっている。ただ建築の業界は、やはり仕事がまた戻ってくると市況が上がることだったり、原料が不足すると急に値段が上がったりということになって、また状況が今後変わってくるだろうと思いますが、その兆候が現れるのは早くても今年の春は過ぎるのかな。夏のちょっと手前くらいに物が足りないものもいろいろ出てきて、輸入材の動向も同じだと思うが、また安易に入らなければならないものがあるのかな。その時期と勢いがどういう形になるのかは、今のところまだ見えない。

○柿澤 座長

続いて川上に移って、現在の生産状況、今後の見通しなどについてお話を伺いたい。

○王子フォレストリー(株) 荒井 代表取締役

私ども素材生産業者としては、いつもアンケートには生産量横ばいと書いているが、結局、作業班のあるだけを目一杯動かしている。それがずっと続いているので、生産数量と

しては横ばいとししか書きようがない。川中川下に対しても、とにかく物がなければ始まらないことで、私たちは今いる作業班を目一杯動かしていますし、それができる状況であることはありがたい。

今非常に困っていることが、いろいろと物価上昇の話が出ていますが、実は重機の値段も概ね2割ぐらい上がっている。重機は、いわばチェーンソーの親分みたいなもので、ほぼ一人1台ぐらい持っていないと、その後の仕事になりませんので、これが上がっているのが非常に今後の事業継続の上では厳しい。

当然、木材価格がある程度のところ安定すれば我々も雇用できますし、その人を目一杯動かしていく。人も増やすよう求人等も頑張っているのが実態です。とにかくこのままできるだけ、やれるだけの事業をやっていきたい。

○今井林業（株） 西村 代表取締役社長

先ほどから建築関係、資材・合板含めて、いろんな原木を使用する用途としては先行きも厳しい。その中で原木を供給するのは基本的には、我々の素材生産業者という捉え方をしているが、常に周りは厳しいですけれども、この先も当然世界状況、ウクライナ含めて、この状況は続くと思うが、製材工場・合板工場を含めて、原木を使うところが厳しいことは我々もそれ以上に厳しいことで、素材生産業だけを考えると立木を買受して素材を生産するのか、もしくは森林管理署を含めてその現場の立木を作業の請負でやるのか、種類としては2つですが、ただ工場と違って、問題は山の奥地に入るので、安全関係が一番最大の問題となっている。年間にすると7万5千m³から8万m³やるけど、ただ現場自体が、重機のオペレーター・伐木手を含めてそれぞれが現場に入ったら、単独作業が多い中で、一人一人に管理者が一人つくかというのがなかなか難しいので、教育も含めてある程度徹底していないと災害が出るということで、実際単独の会社としては7万m³から8万m³は多いと思うが、その中で管理者も含めてですけれども、量を拡大するのは、一社としては限度かな。年間それだけの量をやるには経営面からいくと立木も買ってやらないといけない、それと作業の請負もやらないといけないとなると、立木を買うのが難しいとなって、市況の安定性という部分で、国有林の場合は立木は搬出期限が3年ある中で、これは経営の中で継続していくと、それぞれ作業の請負をウェートに入れながら立木もやりながらという中でやるけど、一番難しいのは、事業拡大、生産性を含めて、ここの安全面が一番多くなればなるほど難しくなっている。今機械で伐倒から含めて9割は機械でできるとなると、オペレーターの熟練した人がある程度いて、範囲が広くなればなるほど危険のリスクが出てくるので、その辺が大事なかなと思って、ただ事業の拡大も含めてですが、素材生産業だけではなかなか難しい。それぞれ地元の製材工場・バイオマスを含めて低質材が出材量の約半分は出てくる。ここの部分は価格も上がって安定していたが、市場自体は常に厳しくなって、これもある程度そう考えていくと、実際山元である素材生産業者は、常に先が詰まっちゃう部分ですけれども、その辺を含めて安全管理さえできれば、まだまだ事業継続・拡大して行けるかなと思うが、やっぱりその辺がどうクリアしていくかが今後の大

きな問題だと思っています。

○北見地方素材生産事業協同組合 山本 専務理事

組合員の事業量は、マックスに近いのかなと思っている。国有林の素材生産及び造林事業をメインにやっている訳ですが、各社道有林さらには民有林との作業の量もありますので、各社は調整をいろいろしている中で、国有林からの素材生産はできるだけ100%やっていきたい気持ちで進めているが、請負生産が増えるとうとう立販が減る。合わせて切る量が増えてくると造林の仕事も増えてくるが、どの産業も作業員を確保するのが非常に厳しくなっている。特に造林事業は、機械化もある程度進んでは来ているが、下刈り、植え付けとなると、どうしても人力になってくるので、そういう意味でいくと作業員の確保が非常に厳しい。特にオホーツク圏は田舎なものですから、最近の若い労働者、若い人たちが根付くことは、それなりの労働条件をよくしていかなないと無理かなと思っています。国有林にもお願いはしてありますが、それに見合うような請負単価の増となることを是非とも考えていただきたい。

造林が増えると苗木の確保も非常に厳しくなっている。これもやはり時期が決められた中で作業を進めていくことになるので、苗畑からも植え付けする時期にスムーズに山出しされるようにならないと、どうしても山で遊ぶ時間が増え効率が悪くなるので、生産をやったり造林をやったりという事業者がいる訳であり、そこはスムーズにいくような仕組みを根本的に考えていただければと思っています。

○柿澤 座長

先ほど佐藤木材工業さんからも素材生産に関する情報提供をいただいたが、ほぼいっぱい動いているとともに、コストの上昇、重機でもお話あり、そういった問題点もご指摘をいただいた。

続いて、今も話題に出ましたが、種苗関係で道苗協の本間さんからお願いしたい。

○北海道山林種苗協同組合 本間 専務理事

苗木の出荷量についてはアンケートでもお答えしていますが、秋の出荷はやや減少、そして春については例年並みで進んでいます。

需給計画は、まだまだ使うことになっていますので、供給する余裕はまだあるので積極的に使っていただきたい。我々も推進していきたいと考えています。

また、伐採が進んでいく中で道内の森林資源を確保していく意味では、確実な植栽が必要ですので、そこは非常に今後とも必要になっていくことで、我々生産者も共通の認識のもとで安定供給に努めていきたい。計画的な設備投資、技術取得を進めている。

安定供給の上で、苗木の受け渡し時期の関係で、もっと適時にスムーズにという話がありました。情報を共有できていないところもあったと思うので、もっと確認する機会を持てるように、今後工夫していきたい。道庁の指導も受けながら、的確にできるように考えていきたい。

○柿澤 座長

川上ということで、森林管理局から状況について話題提供をいただきたい。

○北海道森林管理局 中野 森林整備部長

北海道森林管理局の国有林から出している原木ですけれども、若干落ちてきているところもあるが、依然として割と高値で推移しており、素材の公売についても札が平均2枚とか3枚とか入っており旺盛である。今年度は10%増で生産量をスタートしたが、今のところ計画的に生産できており、引き続き計画的な販売をしていきたい。また来年度に入って引き続きしっかり素材が供給できるように、特に中間土場も活用して、安定的な供給に努めたい。

先ほど、素材生産の業者の皆さんから意見が出ておりますが、国有林の素材の生産、これからも増加する可能性が高いということで、皆さんのご要望も踏まえて、しっかり取り組んでいただけるように、出来ることは反映していきたいと思っております。

○柿澤 座長

川上から話題提供をいただきました。これで皆様からの話題提供は終わります。

② 林野庁からの情報提供

○柿澤 座長

議事の2の林野庁からの情報提供に移りたい。

参考資料について、各自ご参照いただきたいと思います。木材産業の作業安全、それから木質バイオマスにおける持続可能性について等の一部重要な内容について、林野庁の担当から説明をお願いします。

○林野庁木材産業課 伊豫田 課長補佐

参考3について説明。

○林野庁木材利用課 日比野 課長補佐

参考6について説明。

③ その他

○柿澤 座長

それでは、議事の3のその他ですが、全体を通して、何かご意見いただければと思いますが、まず道庁さんから現在の取り組み等について、話題提供をいただきたい。

○北海道水産林務部林務局 常本 木材産業担当課長

北海道林業・木材産業に関する連絡会議の概要も含めて、道の取組状況などについて簡単にお話しさせていただきます。

まず、この連絡会議であります。令和2年4月に新型コロナの感染拡大を契機として、業界団体や木材流通業者と行政が情報を共有するとともに、必要な対策を検討するため、立ち上げたもので、これまでに10回不定期に開催してきており、直近では昨年7月が最後です。

この会議では、道内における輸入材や建築材の需給状況のほか、道外の製材工場や合板

工場を含めた道産原木の需給動向などについて、関係者が情報共有をするとともに、現在抱えている課題などについて意見交換を行ってきたところであり、道ではこれまで皆様の意見を踏まえ、道有林材の供給拡大や、建築材の増産に対する支援事業の創設などに取り組んできたところです。

具体的な取組状況としては、道有林材の供給量については、これまでと比べ1割上乗せした数量で立木販売を行っており、今後も継続していく予定です。また、原木生産に要する燃油高騰分の掛かり増し経費に対する支援、立方75円を上乗せする支援の事業ですが、多くの方に利用していただいているところで、現在申請期限を2月末まで延長して現在3度目の募集をしているところで、引き続き皆様にご利用いただければと考えています。

また、道産建築材の増産に対する立方3千円の支援ですが、こちらも多くの皆様から要望いただいたところで、全道で約2万 m³ 分について支援を行う方向で進んでいる状況です。

現在の本道の林業・木材産業を取り巻く状況は、輸入材の在庫があふれていることや、住宅需要が減少していることなどから、道産建築材の需要が落ちてきている厳しい状況がありますが、今後もこうした急激な国際情勢の変化に伴い、建築材が安定的に確保できなくなることも懸念されることから、道産建築材の供給力を強化し、輸入材から道産材に転換を図っていくことが必要と考えています。

このため、道といたしましては、国の事業も活用しながら木材加工施設の整備に支援するとともに、原木の安定供給や製材工場とプレカット工場の連携を促すなど、既存の需要にも応えながら、効率的で品質の確かな道産建築材の安定供給にも、一層取り組んでいきたいと考えています。

○柿澤 座長

森林総研の嶋瀬さんから全体としてコメント等ありましたらお願いしたい。

○（国研）森林総合研究所 北海道支所 嶋瀬 地域研究監

皆様からのお話を伺って、ウッドショックの影響が今も続いている部分と、反動が来ている部分とが混在しているところへ、木材以外の住宅資材や生産設備の価格上昇が加わり、マーケットが非常に混乱している状況であることを強く感じました。

ウッドショックとその反動については、今後、上に振れたり下に振れたりを繰り返しながらいずれ落ち着いていくと思いますが、もう少し長期的にみたとき、元に戻るようには思えません。というのは、日本の木材輸入状況を時系列で長期にわたって追ってみると、丸太輸入でも製品輸入でも、中国をはじめとする他国に買い負ける状況が、2000年代後半以降強まり、常態化している状況です。特に近年の状況をみると、日本のマーケットが、売り先として必ずしも魅力的ではなくなっており、輸出国にとっては調節弁のような位置づけにだんだん下がってきているのではないかと感じます。つまり、日本が本当に欲しいときは、他の国も欲しいときなので、日本が必要とするだけの木材や木材製品が調達し

づらい状況が、今後はますます強まっていくのではないかと考えています。国産材でなんとか回していける体制を作ることが大事だと思いますし、それがうまく回れば、国産材の割合は当然に高まっていく訳で、マーケットの安定にもつながり、今回のような規模のウッドショックが起きないで済むようになるかもしれない。そういうプラスの意味もあると思っています。

今回のウッドショックで、需要側にも外材一辺倒ではちょっとまずいのではないかとという認識ができたと思います。直近では、高値で輸入された木材の在庫消化が優先という状況ですので、一時的にまた国産材からの外材への揺り戻しが起きている状況かと思いますが、外材一辺倒ではまずいという認識があるうちに、国産材の生産・流通の流れを、体制を強化しておくことが、将来を考える上で重要なのではないかと考えています。内田さんのお話にもあった、道産材をもっと建築材に使っていくためにどうしたらいいのかという議論、その中でも紹介された道内の各生産者・流通業者の方々の間で協定を結び、新しい流れを作っていくための取り組みも、重要と思います。

○柿澤 座長

貴重なコメントいただきました。

皆様から全体を通してコメントとか、追加のご発言等がありましたら伺いたい。

○（一社）JBN・全国工務店協会 武部 理事

今建築用材として道産材を活発に使おう、これはもうここに集まっている方の共通の認識だと思います。ずっと以前から、こういう会議の中で常々言われているが、なかなか具体的に目に見えて進められないのかなという感じはあります。

それで、話題提供ですが、以前、道の空知森林室と取り組んだ事例があります。それは、道有林の立木を見てお客さんに木を選んでもらって、印を付けたやつを切って、それを地域の製材工場で製材して乾燥をかけて、地域の工務店がそれを使ってお客さんの住宅を建てる。森の見える家づくりという事業を10年ぐらい前にやったことがあります。

ただ、なかなか一般的に広報しきれなかった面があって、まだ時期尚早だったということもあったかもしれません。今、脱炭素で建築とりわけ住宅が一番遅れている。他産業は目標はまだいってないですけど減ってきている。住宅が逆に増えてきている。いろんな背景がある中で、これからは非住宅も含めて木の建築というのは追い風が吹いてくる。それに対してどういう木材を使うのか、当然国産材という流れになることで、最終的に建築用材として木材を使う、これは多分日本の再生可能な建築資材の唯一最大のものかなと思っていますので、これらを積極的にPRする意味では、森の見える家づくりのような事業を皆さんで、川上から川下まで共通認識の中で、コアな事業なので一般化して大量にとはならないが、シンボリックな宣伝として業界全体で知らしめていく。また、先ほどは時期尚早と言いましたが、今、これだけ国際的にも国内的にもグリーンビジネス、あるいはゼロカーボン事業、北海道もゼロカーボン推進局という横断的な組織を作って積極的にやろうという時期ですから、お客さんでも、そういうものに対して関心を持っている方は、どん

どん増えてきています。そういうことに反応するお客さんは、多少お金がかかっても道産材を使っていきたいという思考は出てきている。そういうものに対して業界として後押しをしていく。こういう仕事はハウスメーカーではなくて地域の工務店の仕事になってきますから、そういう意味では地域の産業全体としてPRしていくことは非常に大事だと思っています。

最後ですけど、砂川が発祥のSHIROという自然素材を使った化粧品メーカーが道産材を使って、今言ったまさに山に入って一緒に木を切って、それを使って地域の製材工場、地域の工務店で施設を作るという事業を今進行中です。それを企業としてもプロモーションに使っていくという、ただ単に建物を建てるだけじゃなくて、積極的に木の流れを使ってまた自分の事業に帰する。そういうことを積極的に利用していこうという企業も出てきています。そういうことも含めて、皆さん方と情報共有して話題提供という意味でもあります、宣伝、広報の後押しもしてあげることが大事なかなと思って話題提供をさせていただきました。

○柿澤 座長

道産材の活用に関して積極的な応援、ご提案をいただいた。消費者との関わり合いも含めて考えることが大事だと思いますので、貴重なご提案をいただきまして、どうもありがとうございます。

これで本日の議事を終了したい。皆さん貴重なご意見を大変たくさんいただきありがとうございます。良い話題提供になったかと思います。

ここで改めてまとめることはしませんが、今もご発言ありましたように、このウッドショックを機会に、さらに積極的に住宅材としての活用をメインに関わる取り組みが始まった。住宅材をめぐる状況は、不透明で厳しい状況でもあります、こういった今取り組み始められたことを引き続き進めていくことが大変重要だと思います。そういった面でも皆様からこういった形で情報交換、意見交換をする機会が重要だと思いますので、引き続きご協力いただければと思います。

以上